

島根県立大学 総合政策学会
『総合政策論叢』第24号抜刷
(2012年8月発行)

[書 評]

政治的知性再建の試み

—加藤節『同時代史考—政治思想講義』（未来社、2012年）

村 井 洋

〔書評〕

政治的知性再建の試み

—加藤節『同時代史考—政治思想講義』（未来社、2012年）

村 井 洋

本書は冷戦終結後世界規模の政治状況に生じている諸問題を、憲法、暴力、デモクラシー、ナショナリズム、自由と平等といった視座から考察したものである。

著者はヨーロッパ政治思想とりわけスピノザ、ホッブズ、ロックを、宗教批判という視角から論究するとともに、南原繁、丸山真男、福田歓一を範として学問の専門性を踏まえながら現実の政治への批評も行ってきた。本書はこの政治思想史研究と現実政治への関心という二つの知的志向を織合わせ、21世紀において著しく退潮した知識人の知的活動を再建する姿勢を明らかにしている。

著者は冷戦後の世界が著しく複雑な様相を深めるのに対して、それを語る言葉が貧しいままであるという課題意識から出発する。この事態が看過できないのは「思考する実存（これは著者がJ.ロック論に与えたサブタイトルでもあった）」としての人間にとって世界の認識問題は人間の存在問題と相関する重要性を孕んでいるからである。すなわち序章以下の各章の考察に見られるように、政治を豊かに論じるだけの言葉を過去の思想史に遡り、その解釈と適用を通して現代に再生させようとするのである。

それは例えば第一章では以下のように展開される。政治的存在としての人間がなす政治世界に対する思考を政治的現実結びつける基本テキストが憲法であることは多くの人が首肯することであろうが、第一章は憲法をめぐる思想史的考察と憲法の現代的状況批判に関わる。著者は法の支配と立憲主義の歴史を振り返りながら、特にロックの思想の中に人間が政治とかかわる二つの回路、すなわち権力の制限としての「リベラルモメント」と権力を創出する「構成的モメント」が含意されていることを指摘している。この二つのモメントがその後辿った命運においては構成的モメントに比してリベラルモメントがしばしば極小化されることになった。典型的には社会主義国においてであり、また、イスラム諸国においてもまたそうである。このような世界的な動向の下、冷戦後日本の憲法改正論議においてしばしばなされてきた第九条への批判を、九条にも独自のリアリズムがあることを指摘し、却って九条否定論の「リアリズム」が狭小なものになってしまっていることを指摘している。

本書の表題である同時代史とは冷戦後史を意味しているが、著者は冷戦後、世界政治に生じた様々な問題状況をどう捉えているのだろうか。デモクラシーについて言えば、生き残ったりベラル・デモクラシーが社会主義デモクラシーという対手を失ったことによって、自己相対化の契機を喪失するに至ったことが挙げられ、憲法問題については、改憲論が軍

事的ナショナリズムによって動かされている状況を、政治における暴力については、エスニック・アイデンティティの追求が政治を暴力化し、敵の概念を尖鋭的に変化させたことを指摘している。さらに、ナショナリズムについて言えば、冷戦後、国民国家に向かって求心する従来型のナショナリズムに加えてエスニック集団に定位する下位ナショナリズムの動きを生み、国境を軽々と越えつつ行動するヘッジファンドの如きトランスナショナリズムを生じるなど複雑に分化した混濁状況に視線を注いでいる。

このように、問題状況を政治思想の歴史的背景を見据えることによって分析した「講義」とも言える序章から第五章に至る叙述を支えているのが、終章に当たる現実と理念の世界をつなぐ役割としての「知識人」の議論である。著者はリオタールの“知識人の終焉論”に真っ向から対峙し、むしろサルトルの知識人の使命観に同調して不幸な存在に対して共感力のある知識人の復権を唱えるのである。

本書の特徴とはどこに求められるであろうか。

それは一に掛かって、政治思想に意を向けることが冷戦後の政治情勢を考察するために有意義であることを示した点であろう。政治思想のテキストは過去の歴史に閉じ込められた完全に閉じたテキストではなく、現在に向かって開かれた地平をもつことをこの論考は力強く実証している。但し、これらテキスト群の現代に向かう開口部分を見いだすことは必ずしも容易なことではなく、手腕を必要とするということも含めてである。

本書に強いて問題点を見いだすとすれば、知識人論の彫琢にいささかの余地を残すと思われる点である。著者の立場は知識人に積極的な役割を認めたサルトルに範を求めている。しかし、サルトルのかつての論敵カミュが、ルネ・シャールを引用して「収穫への執念と歴史への無関心が私の弓の両端である」（『反抗的人間』）と述べざるを得なかったように、様々な折り重なった不遇を一身に引き受けた存在（著者にとってそれは、第三世界におけるイスラム圏の女性の児童である）への想像力に基づいた同情の心が、しばしば暴力への近道となり得ることに留意しなければならないのではないだろうか。不幸な存在への関心の惹起にバランスする作用は、ただ距離の感覚—あるいは「理性」とも「判断力」とも言える測定能力であろうか—を必要とするし、全編に流れる著者の思考ラインはそれを想定していると考えられる。また、著者が李静和氏の『残傷の音—「アジア・政治・アート」の未来へ』に寄せたスピノザを理解枠組みとした共感的な批評（本書附論Ⅲ）にも遺憾なく発揮されているように思われる。こうした共感的想像力とともに発揮されるべき、知識人の政治的知性の本体により詳細な描写を割いてもらいたかったとの感が禁じ得ない。

著者の論法は主題に直截に向かい、脇目をふらさない。改憲論や知識人の終焉論のような、明白に論敵を前にした議論の際にも必要にして最低限の反論を加えるのみである。議論の中に潜在的論敵を想定してその欠点を弄ぶことを取ってしないこうしたスタイルは最も重要にして必要なことだけに集中する緊張感を行論にもたらし、著者の姿勢の高潔さを窺わせると共に読者に爽快な読後感を与えてくれると言えよう。それは、かつてヤスパースがプラトンに向けた言葉「プラトンは善が存在することに賭けたのである」（『ソクラテスとプラトン』*Die Grossen Philosophen*）に倣って言えば、著者は理性が存在しなとお有効に働くことに賭けたゆえと言えるであろう。

(MURAI Hiroshi)